

第12回

ワークショップでは葛藤が起こった方がいものができる。

高田研さん（森林文化アカデミー教授）



高田研

1954年大阪生まれ。小中学校の教員、国立社会教育施設の指導職員など幅広く教育実践の現場に立つ。現在は岐阜県にある「森林文化アカデミー」の教授として、ワークショップのファシリテーターを志す人々を養成。

21世紀の里山をつくる上でワークショップという手法は必要不可欠といわれている。住民が参加、発言し、つくり上げていく上での要点を聞いた。

ワークショップとは？

その場に居合わせた者が、すべて能動的な自己変革者になるものというのが高田さんの定義。

合意形成の手段と割り切る人もいるが・・・

自由で創造的な学びの場でもある

ワークショップの失敗例

- ・合意形成はされたが深さがない
- ・誰かに決められた感が残る



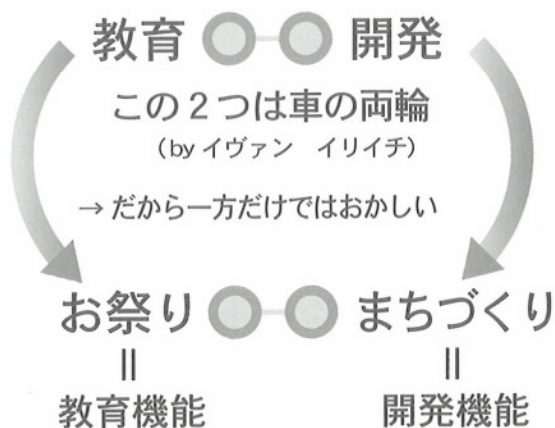
あまりにもキレイにトントンと進むだけでは×。
葛藤があってこそ良いものが生まれる。

例

葛藤の末に決定した公園は後々まで市民が手を入れたが、トントンと進んだ公園はあまり利用もされなかった。



「自分の公園という意識」が育まれたかがポイント

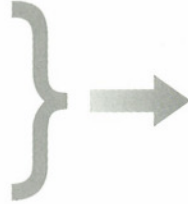


あまりこちら側に軸足をおいてしまうと参加者間の学びあいや本音を言うプロセスが軽視されてしまう

参加のデザイン

まちづくりの分野などではこれが基本

- ① 参加のプロセスデザイン
- ② 参加形態のデザイン
- ③ 参加のプログラムデザイン



でも当日の流れは、
集まった人や、その場の流れ、
スタッフの中でデザインされて
ゆくべし

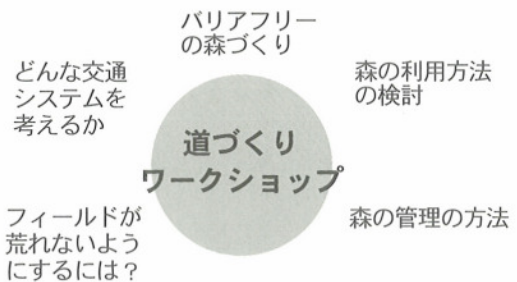
里山でどんなワークショップができそうか？

1. 道づくりのワークショップ

「森の中に道をつくるワークショップ」はいろいろな
可能性がありそう



里山でのワークショップでは、ファシリテーターの育
成も重要だが、
里山の文化、歴史、風景など「全体が見える人」の育
成も重要



2. 里山で暮らす知恵の聞き書き

アメリカにて行なわれた「フォックスファイア」は、
農村で暮らす知恵を地元の高校生が、おじいさん、お
ばあさんに聞き書きするという授業



林野庁もこれを参考に「森の聞き書き甲子園」を開始



トヨタでも全国のディーラーで
知恵の百科事典づくり
をやってみては

求められる人材

本物のワークショップを つくれる人

あまりきれいな流れをつくりすぎず、参加者
と葛藤を共にすることも大切



当日進行するファシリ
テーターだけでなく、
進行の流れを考えるプ
ログラムデザイナーや
参加者集めをはじめと
する場づくりを担うプ
ロデューサーも必要